

2. 地域における当科の役割の変化

そのような取組の結果、当科に次のような変化が見られました。

- ① 平均在院日数：4年前の520日から200日に
- ② 月平均外来患者延数：5年前の1,000人から1,500人に
- ③ デイケア外来参加者の月別延数：92年8月の147人から337人に
- ④ 訪問看護月別延数：92年4月の13人から78人に

以上のことは、当科が従来の治療姿勢を見直すことによって、地域において収容する施設ではなく、治療し地域に戻る通過点として機能して来ていること、患者さん達の地域生活を支援する役割が増大して来ていることを反映していると思われます。このような当科の機能の中核は看護スタッフで、Nsとしての役割の他、時にPSW的、カウンセラー的な役割も期待されています。

多くの社会資源と当科の機能が結び付き、患者さん達の豊かな地域生活を支える地域リハビリテーションネットワークとして充実発展して行って欲しいと願っています。

II. 特別講演

精神医学と神経学の間に…

松浜病院院長

内 藤 明 彦 先生

第197回新潟循環器談話会例会

日 時 平成5年12月4日(土)

場 所 新潟大学医学部 第5講義室

I. 一般演題

1) 原発性悪性心臓腫瘍の1例

伊藤 一寿・岡田 義信 (県立がんセンター)
堀川 紘三 (新潟病院内科)
本間 慶一・根本 啓一 (同 病理)
大関 一・江口 昭治 (新潟大学第二外科)
福田 剛明 (同 第二病理)

症例は48才女性。呼吸困難、胸痛を主訴に近医を受診し、肺炎の診断にて治療を受けていたが難治のため当

科を紹介された。胸部CTで左心房内に充満する腫瘍が認められ入院。UCG、MRI検査では腫瘍は左房の内腔の多くを占拠し、一部肺静脈まで進展していた。原発性心臓腫瘍と診断し、新大第二外科に転院し手術した。術中の肉眼所見では腫瘍は左心房の壁外に露出しており、また右肺門部に直接浸潤がみられ明らかに悪性像を呈していた。組織では免疫組織染色を施行するも起源の確定はできず、肉眼像と合わせて肺静脈由来の紡錘型細胞の肉腫と診断した。組織学的に確定はできなかったが珍しい原発性悪性心臓腫瘍を経験したので報告する。

2) シネMRIによる心房粘液腫の評価

木村 元政・吉村 宣彦
樋口 健史・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)
大関 一・林 純一 (同 第二外科)

心房粘液腫の画像診断は、主として心エコー法が用いられているが、MRIも任意の断面で撮像できることからSE法を用いた報告も認められるようになってきた。シネMRIは、心房内の血流停滞信号に影響されずに、腫瘍描出が明瞭に行われる。今回は手術所見と対比することにより、シネMRIの臨床的意義について検討した。

対象は、1991年2月から1993年5月までに摘出手術が施行された心房粘液腫で、術前シネMRIが撮像された左房粘液腫6例、右房粘液腫2例である。シネMRIは、FLASH法($TR=R-R$, $TE=12$, $FA=30$)を用い、横断像・心長軸像を基本として撮像し、A-M斜位像・四腔断像を追加した。

SE法では、3例で血流停滞信号により腫瘍の全体像が不明瞭であったが、シネMRIでは、全例で腫瘍の描出は良好で付着部位も同定できた。腫瘍付着部位は、心房中隔卵円窩が4例であり、他に卵円窩頭側・左房前壁・左房後壁・右房下大静脈側であったが、動画像で観察することにより確実に診断できた。手術の難易度は腫瘍付着部位の位置に左右されることが多く、付着部位及びその径の正確な評価が診断上最も重要であると考えられた。